

現代日本語の「どんどん」文の事象構造分析

小西 正人

抄録：Jackendoff (1996) により提唱され、岩本 (2008) により新たな展開を見せた事象アスペクト論に基づき、小西 (1999, 2003) で展開した現代日本語の「どんどん」に関する事象アスペクト的意味を再考する。そして3種類の事象的意味をもつ状態変化自動詞「どんどん」文に対して新たな事象投射構造を与えると同時に、修飾表現「どんどん」のもつ語彙的な事象意味を形式化する。さらにそこで得た結論から、小西 (1999) で提示した問題に新たな解答を示すと同時に、現在の事象投射表示における問題点を述べる。

0. はじめに

Davidson (1967) が事象 (event) を項とした文意味分析を行って以来、「事象意味論」のもとでの事象の内部構造に関する理論的研究が盛んとなった。なかでもアスペクト的意味の研究については、Dowty (1979)、Parsons (1990)、Jackendoff (1996) など多くの研究者がこのアスペクト的意味と事象構造を結びつけようとしており、日本でも Vendler の動詞句4分類を基に影山 (1996) などが語彙概念構造を用いた試みを行っている。

本論文では、事象意味論について Jackendoff (1996) の構造保持束縛理論を発展させ「事象投射理論」という新たな展開をもたらした岩本 (2008) の事象意味表示を用いて、小西 (1999, 2003) で扱った現代日本語の「どんどん」を伴う文意味を再考するとともに、事象意味表示についても「どんどん」文分析からの示唆を行いたい。

本論文の構成は、以下のとおりである。第1節において小西 (1999, 2003) における現代日本語「どんどん」文の分析を概観したのち、第2節においてそれらについて、岩本 (2008) で示されている事象投射構造表示をもとにして各「どんどん」文の意味表示を示す。そして第3節では、「どんどん」自体がもつ語彙的意味を形式化するとともに、前節で得られた分析をもとに小西 (1999) などで扱われた問題に対し再考を試みる。そして第4節ではまとめと今後の展望について述べる。

1. 小西 (1999, 2003) による「どんどん」文の意味表示

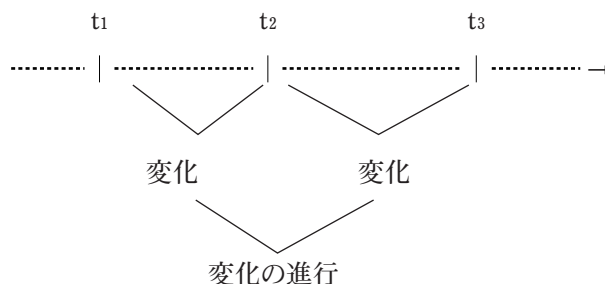
修飾表現「どんどん」を扱った小西 (1999) では、おもに状態変化自動詞「どんどん」文を分析し、その一般的意味を記述するとともに、3つの事象的意味を区別した。以下ではその内容について、簡単にふりかえる。

まず一般的意味については、「どんどん」文は、

1. process という事象的意味をもつこと
2. atelic であること

- 3. 事態変化が連続的に進行することをあらわす表現であること
- 4. 何らかの蓄積を伴う事態を記述する必要があること

を示した。3. については以下の図を示し、変化が2つ以上、観察時点は3つ以上必要であることを述べた。



また「どンドン」文のあらわす3つの事象的意味については、それぞれ、1) 程度の進行をあらわす「どンドン」文、2) 部分・範囲の進行をあらわす「どンドン」文、3) 事象・対象の複数をあらわす「どンドン」文として、分析を行った。以下にそれぞれの事象的意味および具体例、それぞれの意味に解されるおもな動詞、そして Jackendoff (1996) に基づいた事象意味表示を小西 (1999, 2003) より挙げる。

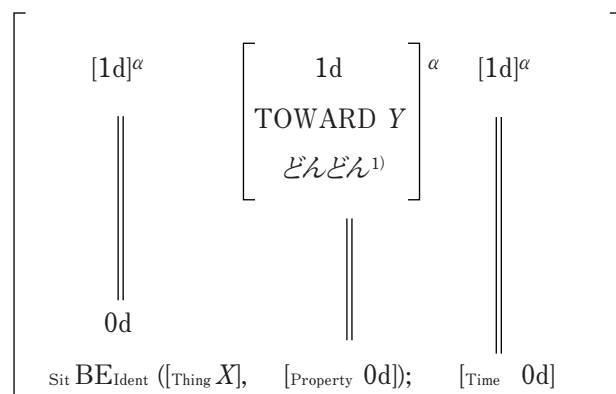
1) 程度の進行をあらわす「どンドン」文

事象的意味：対象（参与者）XがYになる、しかもその「Y（である）」というのは方向性を伴うスケール（尺度）をもった述語であり、その変化進行の程度が「どンドン」により修飾されている。

具体例：どンドン風船がふくらむ、どンドン顔が赤くなる

おもな動詞：枯れる、乾く、崩れる、冷える、広がる、腐る、太る、しぼむ、澄む、曲がる、腫れる、ほどける、酔う、離れる、上がる、近づく、混じる、など

基本意味表示：



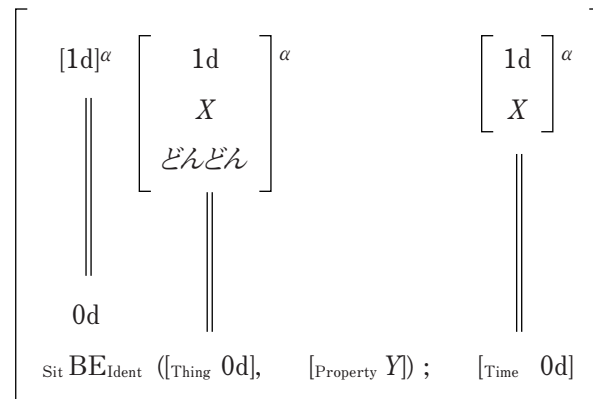
2) 部分・範囲の進行をあらわす「どンドン」文

事象的意味：対象（参与者）Xがあり、その対象の部分から、連続的に $\neg Y \rightarrow Y$ という変化が進行し、その進行具合が「どンドン」により修飾されている。

具体例：どンドン湿布が（端から）はがれる、どンドン氷が割れる

おもな動詞：裂ける、塞がる、千切れる、かぶさる、出る、破れる、割れる、埋まる、塗る、はずれる、削る、重なる、など

基本意味表示：



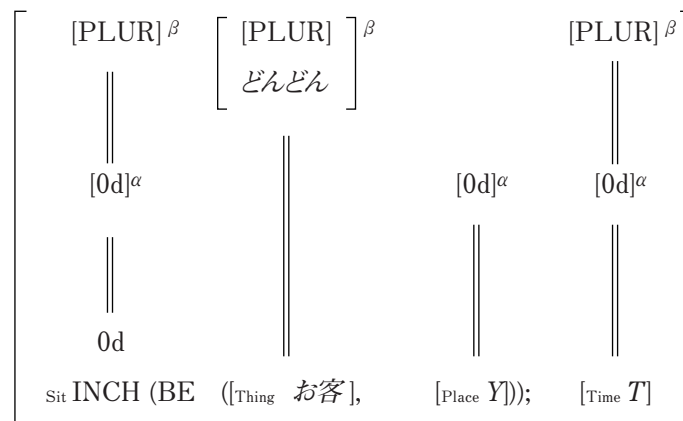
3) 事象・対象の複数をあらわす「どんどん」文

事象的意味：対象（参与者）Xがあり、その対象において $\neg Y \rightarrow Y$ という変化が起こり、その変化を被った対象の数の増加の進行が「どんどん」により修飾されている。

具 体 例：どんどんお客さんが到着する、どんどん犯人たちが捕まる

おもな動詞：勝つ、立つ、生まれる、死ぬ、届く、見つかる、つかまる、始まる、来る、買う、授ける、渡す、ぶつかる、就職する、解散する、など

基本意味表示：



以下では、Jackendoff (1996) の表示を修正し発展させた岩本 (2008) の事象投射理論を用いて「どんどん」文を再考するとともに、そこから見えてくることについて論じる。

¹⁾ここでは修飾表現「どんどん」について経路を修飾する形で表示したが、実際は構造保持束縛 (sp-binding) によって事象軸や時間軸にも同じ形の進行的意味が与えられている。

2. 岩本（2008）の事象投射理論による「どんだん」文の分析

本節では、前節で挙げた3種類の「どんだん」文の概念構造について、事象投射理論に基づく表示を提示する。

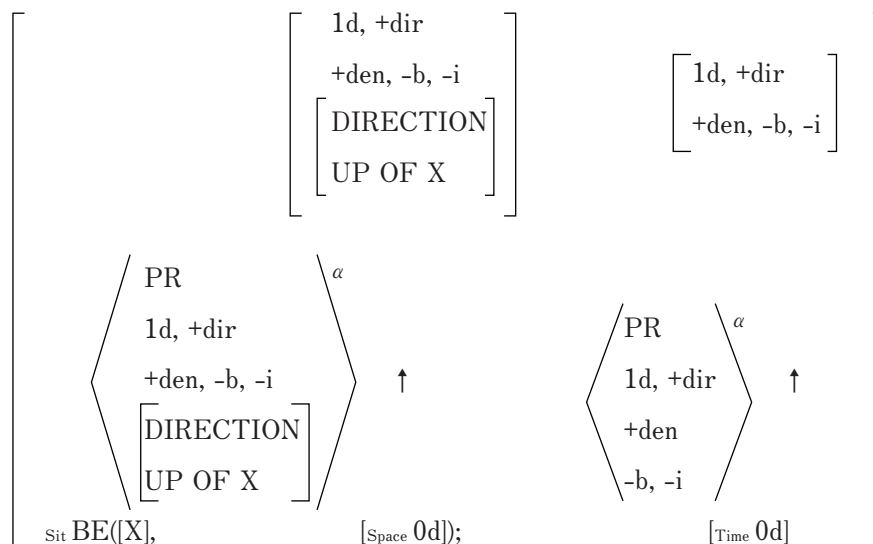
まず「どんだん」文全体に通じることとして、前節でも示したとおり「どんだん」文は process という事象であり、また atelic な事象であるので、全体的な形としては [+dense] 素性が指定されなければならない。[±dense] 素性というのは、岩本（2008）では「〈動き〉が [+dense]、〈変化〉が [-dense]」（岩本 2008: 130）というように〈動き〉／〈変化〉を弁別する素性と捉えているが、ここでは「稠密性素性」という名のとおり対象が稠密であるかどうかを示すものとする²⁾。すると「どんだん」文は単なる「 $\neg Y \rightarrow Y$ 」という [-dense] の変化ではなく、時間幅をもち進行する変化をあらわしているため、[+dense] 素性をもつということになる。

次にそれぞれの「どんだん」文について、各小節に分けて考察を進める。

2. 1. 程度の進行をあらわす「どんだん」文

まず程度の進行をあらわす「どんだん」文であるが、岩本（2008）にはそれに関連する表示がいくつか示されている。ひとつは〈自己基準変化〉をあらわす事象投射構造である。〈自己基準変化〉とは「物体の位置、境界、量やサイズが、それ自身を基準として変化するもの」（岩本 2008: 280）で、「進む、上がる、下がる（位置変化）、伸びる、広がる、膨らむ、縮む（境界の位置変化）、増える、減る（量やサイズの変化）」などの例が挙げられている。ここでは非有界的な「上がる」の構造表示を示しておく。非有界的な表示を挙げるのは、「どんだん」文が atelic であり、通常非有界的事象をあらわすためである³⁾。

(1) 自己基準的な位置変化：「上がる」[非有界的]（岩本 2008: 283）



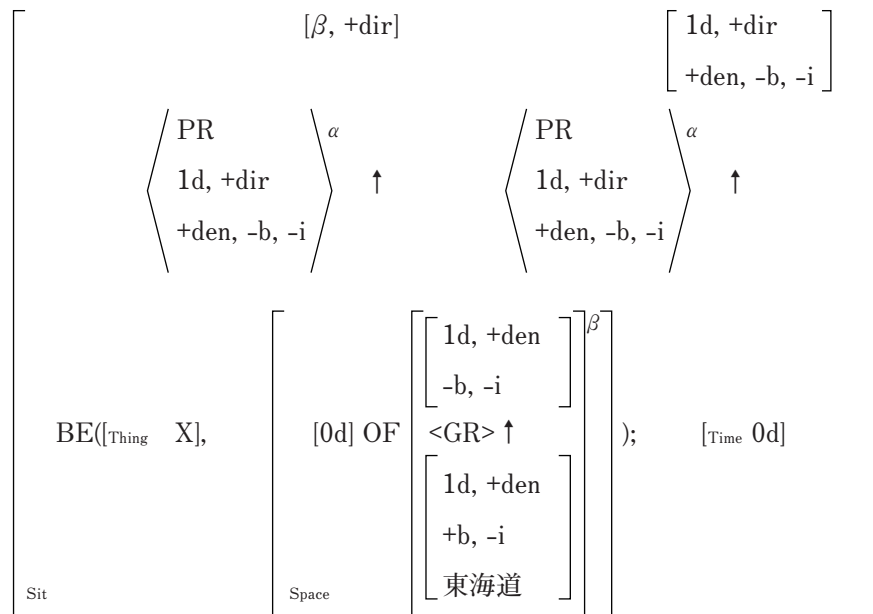
²⁾ 岩本（2008: ix）の記号・用語一覧では「〈稠密性素性〉。投射関数の素性。実体が稠密的に投射しているか、それとも始端、終端のみで構成されているかを区別する。」とある。

³⁾ 岩本（2008: 283）では「上がる」以外にも「進む」「下がる」などの動詞の事象投射構造がまとめて示されているが、ここでは本論文に関連する「上がる」をあらわす部分だけ取り上げる。

上の表示について関連する点を述べると、「ある時間に、ある位置に存在する X」という状態が、「Xの上方」という方向に稠密的（[+den(se)]）・非有界的（[-b(ounded)]）に投射され、事象となっている（詳細については Jackendoff 1996 や岩本 2008 を参照）ということである。

また同じような稠密的・位置変件事象である経路事象については、岩本（2008）では次の表示を与えている。

(2) 限界的経路事象の非限界的解釈（岩本 2008: 291）「東海道を歩く」

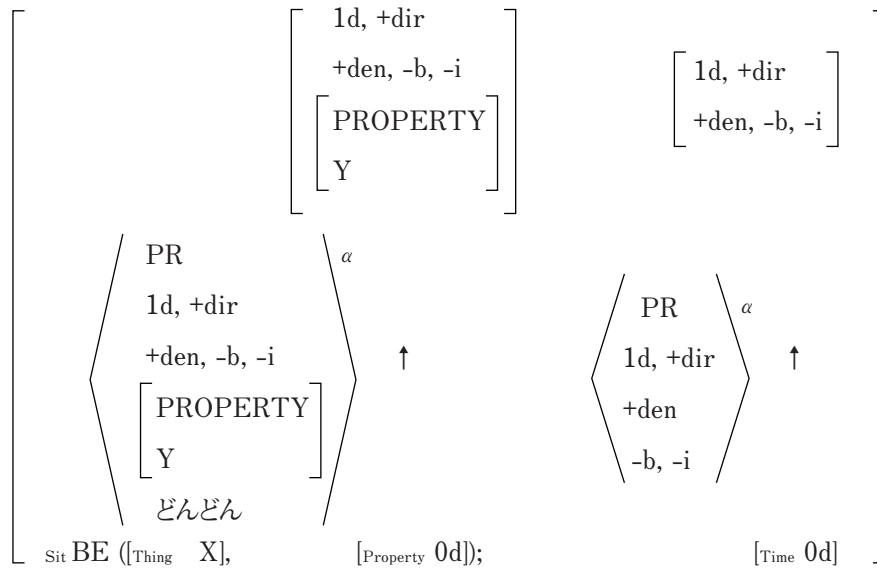


こちらも関連する点を述べると、「ある時間に、「東海道」上のある位置に存在する X」という状態が稠密的・非有界的・一方向的（[+dir(ectional)]）に投射され、事象となっているということである。

両者の表示は細部では多少異なっているが、それぞれが完全な詳細表示でないことや、方向性をもったスケールをどの位置に配するかということによる差異であり、投射自体は大きく異なるものではない。

この二つの表示をもとにすると、程度の進行をあらわす状態変化「どんどん」文は以下のように表示できる。

(3) 程度の進行をあらわす状態変化「どンドン」文



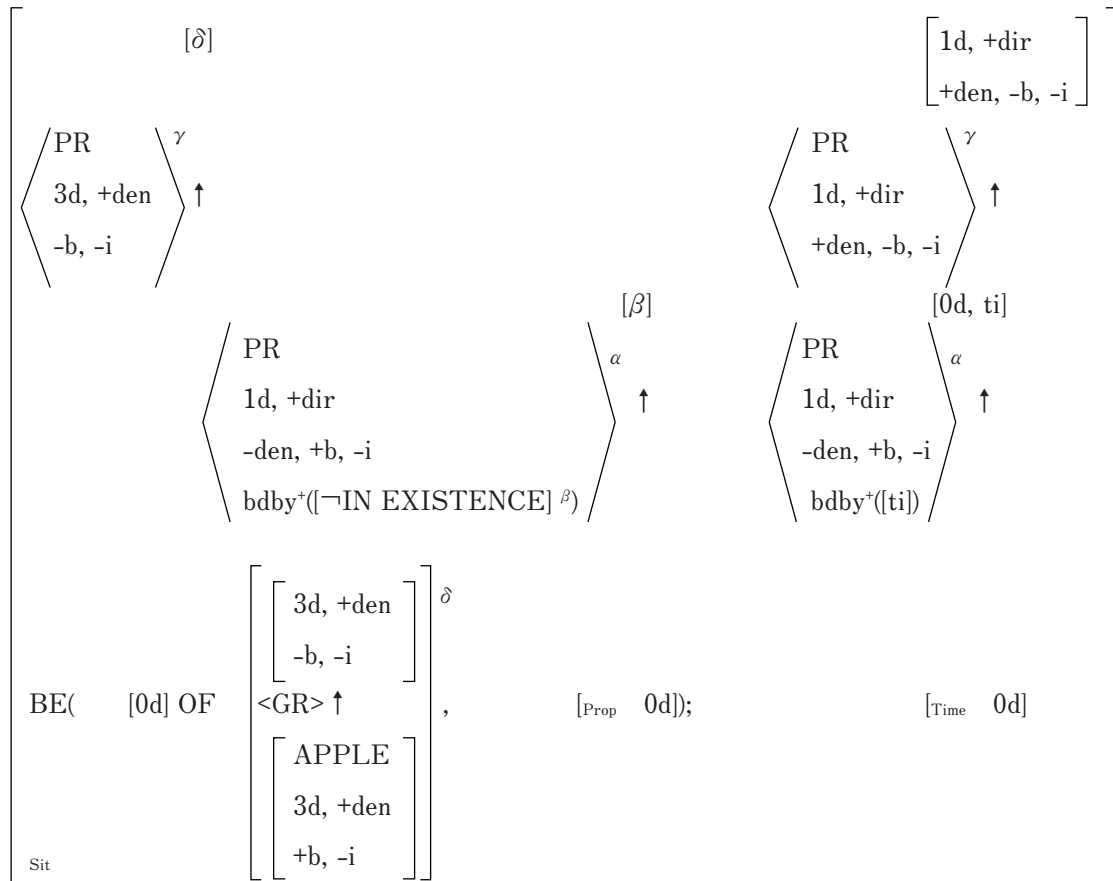
位置変化などをあらわす場合の位置変化「どンドン」文の表示については、基本的には(2)のままでよいと思われるため、ここでは小西(1999, 2003)でもおもに論じた状態変化「どンドン」文について取り上げた。異なる点は、位置変化「上がる」では[DIRECTION UP OF X]とあったところを[PROPERTY Y]と改めたところである。Propertyの経路が方向性をもつスケールであることは、この投射が[+dir]であることが保証している。YではなくY-er than Xiとして「XiよりYである」ということをここで示す必要があるかもしれないが、述語によって異なる可能性もあり、また位置変化でもそのように表示されていないことから、ここでもそれにしたがった表示とする。

ひとつ問題になるのが「どンドン」そのものをどこに入れ込むかということである。「どンドン」が修飾するものは変化の進行具合であり、ここではPR投射されて形成された[1d, +dir]という経路(これはもともとの[PROPERTY Y]がもつスケールに由来する)を進む「進み方」である。ここではとりあえず「どンドン」の修飾にどの部分がかかわっているかということを示すためにPR投射の中に入れておいた。

2.2. 部分・範囲の進行をあらわす「どンドン」文

次に部分・範囲の進行をあらわす「どンドン」文について考える。ここでは岩本(2008)で挙げられている消費動詞の事象投射構造を参考にする。岩本(2008)ではeat an appleという句の非限界的解釈に対して以下の表示を与えている。

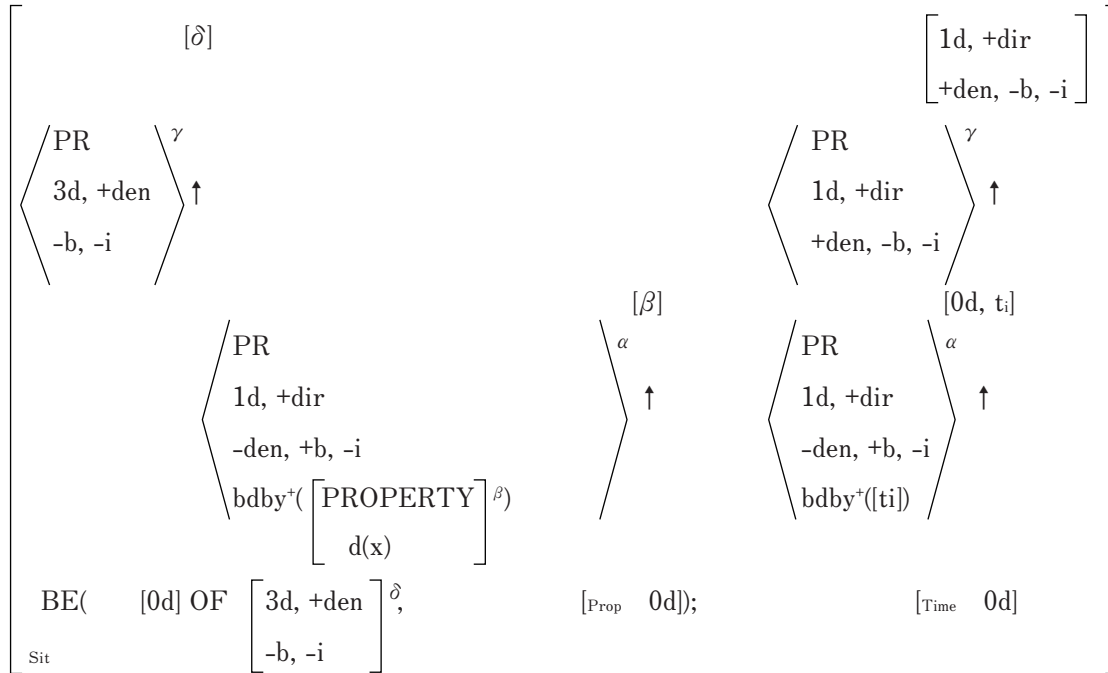
(4) eat an apple (非限界的) (岩本 2008: 296)



ここでも必要な部分の概略を述べると、「りんごのある一点が非存在となる変化が、そのりんごのいろいろな部分に及んでいく」というものである。ここでは、対象であるりんごを GR 関数で非限界化し、その中の一点の性質を $[\neg \text{IN EXISTENCE}]$ の状態に変化するということが α 指標のついた PR 投射で示され、その変化が対象であるりんごのある一点 ($[0d] \text{ OF } \delta$) から (非限界的) りんご ($[\delta]$) のいろいろな部分に及ぶということが γ 指標のついた PR 投射で示されている。

また岩本 (2008) は増分的主題をもつ事象の一般形について、以下の表示を提案している。

(5) 増分的段階性到達：自明標準値の場合（岩本 2008: 303）



部分・範囲の進行をあらわす「どんどん」文についても、ここでの増分的・段階的到達とほぼ同じと考えてよいだろう。またこの反対の意味をもつ作成動詞（他動詞）、出現動詞（自動詞）についても同じ構造をもつと考えられる。ここでは「どんどん」は Property 項がもつ経路投射の中にあらわれると考えるのが、上述の程度の進行をあらわす「どんどん」文と統一した扱いであると考えられる。

ただここで気になるのは γ 指標をもつ PR 投射である。対象のほうでは $[3d]$ 素性をもつにもかかわらず、時間軸では $[1d]$ 素性を与えられている。岩本（2008）ではこのことは特に問題とされていないが、変化がすでに起きた対象部分とまだ起きていない対象部分を区別するためにも、最下段の状態の部分か、あるいは PR 投射を行う部分で $[nd]$ 素性をもつものを $[1d, +dir]$ という素性をもつ経路に変更するような関数を設定する必要があると思われる。そうすれば「どんどん」はその経路の進行具合を修飾するものとして記述することができるだろう。

2.3. 事象・対象の複数をあらわす「どんどん」文

最後に事象・対象の複数をあらわす「どんどん」文についてみてみたい。岩本（2008）では複数化された（単一）事象がもつ事象投射構造について、以下の事象投射をもつとしている。

(6) 複数 (岩本 2008: 234)

$$\left[\begin{array}{cc}
 [1d, -b, +i] & [1d, -b, +i] \\
 \langle \text{PL} \rangle^\alpha \uparrow & \langle \text{PL} \rangle^\alpha \uparrow \\
 [1d, +b, -i] & [1d, +b, -i] \\
 & \uparrow \\
 & \dots \\
 & \langle \text{PR} \rangle \uparrow \\
 \text{Sit} & \text{BE}([X], [Y]); & [\text{Time} \ 0d]
 \end{array} \right]$$

この表示は「ある時点において X が Y である」という状態が PR 投射されて [1d, +b, -i] という素性をもった (単一) 事象が、PL 関数により複数化されていることを示している⁴⁾。事象・対象の複数をあらわす「だんだん」文では、その名のとおり事象・対象の複数をあらわすのであるから、以下のような事象投射構造をもつと考えられる (岩本 2008: 230 の例 (99) 「風船を割っている (配分)」も参考にした)。

(7) 事象・対象の複数をあらわす「だんだん」文

$$\left[\begin{array}{ccc}
 & [-b, +i] & [-b, +i] & & & [-b, +i] \\
 \left\langle \begin{array}{l} \text{PL} \\ \text{だんだん} \end{array} \right\rangle^{\delta} \uparrow & & \langle \text{PL} \rangle^{\delta} \uparrow & & & \langle \text{PL} \rangle^{\delta} \uparrow \\
 [1d, +b, -i] & & & & & \\
 & & \left\langle \begin{array}{l} \text{PR} \\ 1d, +dir \\ -den, +b, -i \\ \text{bdby}^+([\text{PROPERTY } Y]^\beta) \end{array} \right\rangle^{\alpha} \uparrow & & \left[\begin{array}{l} 1d, +b, -i \\ [0d, t_i] \end{array} \right] & \\
 & \text{BE} (& \left[\begin{array}{l} \text{Thing } X \\ +b, -i \end{array} \right] & [\text{Prop } 0d]); & \left[\begin{array}{l} \text{Time} \\ 0d \end{array} \right] & \\
 \text{Sit} & & & & &
 \end{array} \right]$$

この「だんだん」文では、[-dense] の素性をもつ単一到達事象を複数回生起させることにより、本来「だんだん」では修飾できないはずの到達事象との共起が可能となっている。「だんだん」はこの PL 関数と関係して複数事象全体を修飾していると考えられる。

ただ本来 [-dense] であるはずの事象をいくら複数重ねたところで [+dense] になることはできない。それらの複数回事象は「同時生起」と解釈されこそすれ、継起的生起と解釈されるにはやはりそれらの事象を経路に沿って並べるような操作 (そしてその経路をつくりだす操作) が必要となるだろう。

⁴⁾ 岩本 (2008: 166) ではこの左上の [1d, +b, -i] 素性について「ここでは次のように仮定する。単一事象の事象投射構造において、[+b] 投射、あるいは COMP 関数によって限界性 [+b] が導入されたとき、事象に [1d, +b, -i] を与える。」と説明がある。解釈としては、限界づけられることによって atomic なものとして個別化され、ひとつのコトとなった「単一事象 e」の素性を左上に表示したものと考えてよいだろう。事象 e の表示については、Jackendoff (1996: 320) の脚注 14 も参照。

また、この表示では「ドアをコツコツとノックする」のような多回的事象 (semelfactives) との区別がつけられないという可能性がある。多回的事象はあくまで単一事象であるのに対し⁵⁾、ここでの「どんどん」文は単一事象の複数生起という派生的事象である。この問題については、多回的事象の表示を工夫して別表示とするか、あるいは事象項 e (あるいは左上に表示される [1d, +b, -i] の解釈) を用いて (場合によっては) 別のレベルで表示する必要がある。さらに別の解決法としては、多回的事象を複数事象と同じとみなすというやり方もあるだろう。ここでは、この問題についてふれるにとどめておく。

次節では、これらの「どんどん」文に共通する「どんどん」の語彙的意味について、その事象意味表示を考えたい。そして小西 (1999) で示唆した問題についても、今回の表示によってどのような解決が得られるか再考するとともに、事象投射理論の問題点についても述べる。

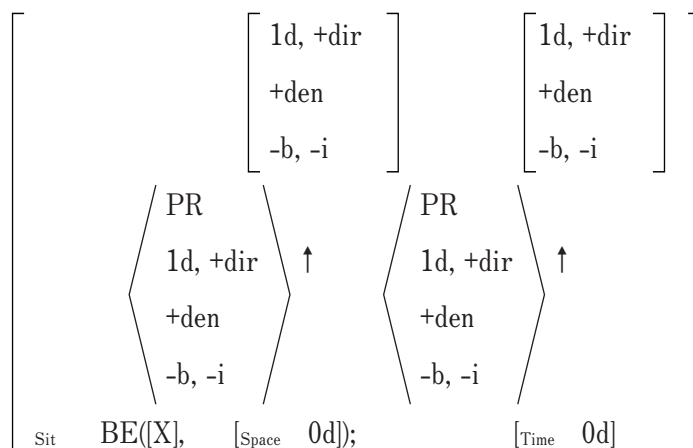
3. 「どんどん」文の事象投射構造表示から

3.1. 「どんどん」の語彙的意味について

第2節で3種類の「どんどん」文の事象投射構造表示をみた。細部には若干の差はあるものの、いずれも小西 (2003) で示したとおり、事象構造において経路投射を行うときの投射の一部として経路を修飾するという形はそれほど変わることはない。しかし、動作そのものの様態を修飾する修飾表現 (「どろどろと溶ける」「ひらひらと落ちる」など) と、「どんどん」のように経路の進行具合を修飾する修飾表現とが同じように表示されるべきであるのか、あるいはそのような差異は事象投射構造内で別表示を与えられるものではなく、他の部分で区別されるべきものであるのかという問題は十分に論じられたとはいえない。この問題については今回は結論を出すことはできないが、両者の修飾表現の性質の違いについて、以下で簡単に述べる。

この点に関して、岩本 (2008) では単純な様態修飾表現「ひらひらと」だけではなく、やや「経路の進行程度」と関連する場合もあると考えられる「ゆっくり」についても同じ表示を与えている。

(8) 「ゆっくり」「ひらひらと」(岩本 2008: 249)



⁵⁾ もちろん文脈等により「ドアを3回、コツコツとノックする」のように単一事象の複数回生起と解釈することも可能である。

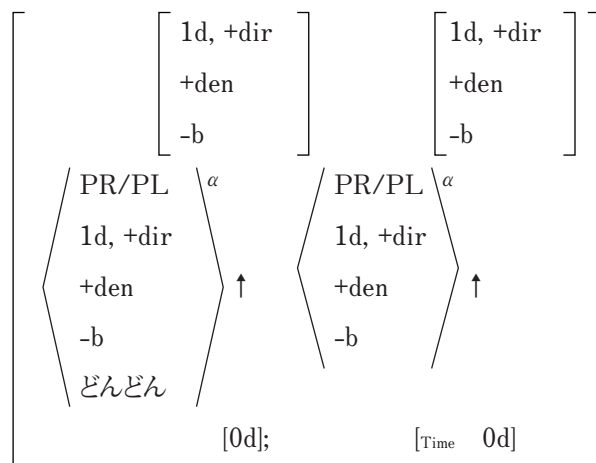
これをもとに岩本 (2008) では「ゆっくり倒れる」という文の事象投射構造を示している。ただ、特に「ゆっくり歩く」というような移動動詞の場合、行為自体が「ゆっくり」と修飾されているのか、あるいは移動に関して「ゆっくり」であるのかという多義が関係することになり、注意が必要である⁶⁾。これについては3.2. でふれる。

さて「どンドン」であるが、ここでの3つの意味に共通するのは、上述のとおり「事象構造において経路投射を行うときの投射の一部として経路を修飾する」というものであり、そうすると岩本 (2008) の示す「ひらひらと」との類似性が考えられる。しかし単純な様態修飾表現はPR 投射において様態を修飾することはできても、事態の複数を解釈規則で作り出すような操作が行われることはない。むしろ積極的に事態の複数という意味を投射として語彙的にもつのは「次々に」というような修飾表現であり、岩本 (2008: 237) ではこの表現に対してPL 関数を導入するものとして表示を行っている。

「どンドン」に対しては、この二つの表示、すなわちPR 投射に伴う経路の修飾、および複数関数PL に伴う経路の修飾という両方の修飾が可能となるような語彙の意味を与える必要がある。そこで「どンドン」に関連する関数としてPR またはPL のいずれかが適用されるということで、投射についてはPR/PL と表記し、素性 $[\pm i]$ についてはそれぞれの関数にしたがうこととする。すなわちPR が適用された場合には結果は $[-i]$ となり、PL が適用された場合には結果は $[+i]$ となると考える。また適用される「入力元」であるが、程度の進行をあらわす「どンドン」はProperty のある状態もしくはSpace のある一点 ($[\text{Property/Space } 0d]$)、部分・範囲の進行をあらわす「どンドン」はThing のある一点 ($[\text{Thing } 0d]$) であった。しかし事象・対象の複数をあらわす「どンドン」では、関数の入力は $[1d]$ となっている (より正確には $[\text{Sit } 1d]$)。ここで複数化される各事象を点的なもののみならずそれぞれを $[0d]$ と再解釈するか、あるいは事象の複数をあらわす「どンドン」は $[1d]$ 素性をもつ各事象を経路に沿って並べて新たな事象を形成するかと考えるか、二つの選択肢があるだろう。それともむしろ程度や部分の「どンドン」の入力のほうを $[1d]$ と解釈するよう表示を修正するという方法もある。すなわち意味的には「どンドン」は事象を形成する「変化」の進行具合を修飾するものであり、変化を岩本 (2008) のように常に $[-dense]$ であり、したがって $[0d]$ であると考えられる場合でも、「どンドン」のあらわす変化は漸進的变化であるため、その変化は $[+dense]$ であり、その事象は $[1d]$ となる。そして「どンドン」はこの $[1d]$ という性質をもつ変化事象に対して修飾を行う (もし $[0d]$ であれば解釈規則がはたらいって $[1d]$ 化されればよい) とすることもできるだろう。しかしここでは各事象を点的に捉えることとし、 $[0d]$ の事象を経路に沿って投射するという形をとっておく。これにより、そもそも $[-dense]$ であり $[0d]$ である到達事象にも適用できることが説明できる。すると「どンドン」の一般形は以下のものとなる。

⁶⁾ そしてそもそもこの二つの意味を多義 (ambiguous) とするのか、それとも曖昧 (vague) と考えるのか、そして多義とするならどのようなレベルでの多義と考えるかということについてはそれぞれの言語理論を背景とした議論が必要となってくる。ここではこれについては詳しく述べることはできないが、3.2. で若干関連する議論を行う。

(9) 「どんどん」の語彙的事象構造



ここで「どんどん」によって導入される [-b] 素性は強い意味をもつと考えなければならない。これは「どんどん」という語のもつ本質的な意味である。したがって、COMP 関数で事象を限界づける「まで」句や「3回」などの回数表現は「どんどん」文において共起することは難しい。

- (10) a. # どんどん駅まで走る。
 b. #? どんどん3回溶ける。

これは「どんどん」の語彙的意味により事象が atelic であるとされたにもかかわらず、COMP 関数により事象を限界づけるということが矛盾を生じるためであると考えられる⁷⁾。この場合、各個別事象は限界づけられていても全体としては限界づけられない「複数事象生起」の解釈がとられることになる。語彙的に限界状態をもつ解釈が主となる「倒れる」などの動詞についても、「ゆっくり人が倒れる」という表現では開始から終結までの間を考えることができるのに対し、「どんどん人が倒れる」という表現では事象の複数解釈が通常である。これは「人が倒れる」という表現が通常「人が倒れた状態」を最終状態としてもつ状態変化であると解釈されるため、atelic であることを語彙的意味としてもつ「どんどん」と矛盾してしまうからである。

3.2. 関連する問題について

本節では、小西 (1999) で提出されていたいくつかの示唆について、新たな表示のもとでそれらを再構築するとともに、それらがもつ意味について考える。

まず「どんどんごみを捨てる」という文について、この文は対象「ごみ」を物質名詞 (mass noun) のように考えるのか、それとも複数のごみを考えるのか、さらには「ごみ捨て」という複数の事象と解釈されるのかという「多義」の問題を含んでいる。この問題については Jackendoff (1996) の構造保持束縛理論の段階である程度解決できるものである。すなわち対象「ごみ」の性質については、解釈時に [-b] の指定があれば、物質名詞 [-b, -i] および複数 [-b, +i] の両方の解釈を含むことができる。これは「ごみ」という語が語彙的に atomic であるかどうか指定されていない (あるいは指定が

⁷⁾ ここでは岩本 (2008) で過剰な解釈規則の導入を阻止するために提唱された〈解釈規則による事象投射構造の空虚化を禁ずる原則〉あるいはそれに準ずるものとして考えられる。

弱い) ためである。また複数事象解釈になる場合は、対象であるごみの複数を示す経路が事象と構造保持束縛関係をもち、単一のごみを捨てる複数の「ごみ捨て」事象という解釈が成り立つことになる。

多義 (ambiguous) か曖昧 (vague) かという問題は他にもある。前節で取り上げた「ゆっくり歩く」という文における「ゆっくり」の修飾について、動作としてゆっくりであるということであらわすのか、それとも進む距離がゆっくりであるということであらわすのかという問題がある。この場合、前者は AFF を含む行為事象投射構造において「ゆっくり」の修飾が行われているのに対し、後者は BE を含む事象投射構造において「ゆっくり」の修飾が行われていると考えればよい。そして特にこの区別を必要としない場合は、両方の構造において構造保持束縛がされており、行為としての「ゆっくり」と経路 (の進行) としての「ゆっくり」が同時に行われていると考えればよい。しかし「柿がどんどん赤くなる」という場合はどうであろうか。程度と部分に関して意味の区別が厳密でない場合、どちらにも「どんどん」が修飾していると考えるのはあまり実感とは合わない。むしろ程度や部分などを一括した「事象全体としての進行」について修飾が行われているように感じる。

Rothstein (2004) では達成事象 (accomplishments) について、作成事象を例にあげ、対象との同型性 (homomorphism) が直接成立しない場合があることを述べている (“there are cases where events have parts which do not directly affect a part of the theme: thus in an event of building a house there is the stage at which you put up the scaffolding and the stage at which you take it down again; in neither case is the extent of the house affected by the event at that stage.” Rothstein 2004: 97)。この場合も、対象のもつ填充性 (extension) がそのまま経路となるわけではない (ことがある) という例である。いずれの例についても、程度のスケールや対象部分の増分性など関係をもつものの、それと同じではない「事象そのものの経路」が必要となってくる場合である。この「事象そのものの経路」をどのように表示するかは、次回の課題としたい。

4. まとめと今後の展望

本論文では、Jackendoff (1996) により提唱され、岩本 (2008) により新たな展開を見せた事象アスペクト論に基づき、小西 (1999, 2003) で展開した現代日本語の「どんどん」に関する事象アスペクト的意味を再考した。そして3種類の事象的意味をもつ状態変化自動詞「どんどん」文に対して新たな事象投射構造を与えた (第2節)。そこで示した事象投射構造から修飾表現「どんどん」の語彙的な事象意味を形式化するとともに、限界事象と共起して単一事象内での修飾ができないのは「どんどん」のもつ atelic という語彙的意味であることを示した (3. 1.)。さらに小西 (1999) で提示した示唆を再構成してその解決を図るとともに、現在の事象投射表示における問題点を述べた (3. 2.)。今後は本論文で論じ足りなかったいくつかの項目についてさらなる証拠を挙げて追究する必要がある。

文献

- Davidson, Donald : “The logical form of action sentences.” In N. Rescher, ed., *The Logic of Decision and Action*. Pittsburg: University of Pittsburgh Press. Reprinted in Donald Davidson, 1980, *Essays on Actions and Events*. Oxford: Clarendon Press, 1967.
- Dowty, David R. : *Word meaning and Montague grammar*. Dordrecht: D. Reidel Publishing Company, 1979.
- 岩本遠億 [編著] : 『事象アスペクト論』、東京 : 開拓社、2008。
- Jackendoff, Ray : “The Proper Treatment of Measuring Out, Telicity, and Perhaps Even Quantification in English.” *Natural Language & Linguistic Theory*, 14: 305-54, 1996.
- 影山太郎 : 『動詞意味論 —言語と認知の接点—』、東京 : くろしお出版、1996。
- 小西正人 : 「変化述語をもつ「どんだん」文の意味からわかる「動詞固有の意味」と「文の意味」、そしてその関係について」、京都大学言語学研究会『言語学研究』17・18 合併号、45-57、1999。
- 小西正人 : 『具体的発話への動詞の寄与 —特にアスペクトの意味について—』、京都大学大学院文学研究科博士論文、2003。
- Parsons, Terence : *Events in the Semantics of English: A Study in Subatomic Semantics*. Cambridge, MA and London: The MIT Press, 1990.
- Rothstein, Susan : *Structuring events: a study in the semantics of lexical aspect*. Blackwell Publishing, 2004.

An analysis of Japanese sentences with the adverb *dondon* through event projection theory

KONISHI Masato

Abstract : The aim of this paper is mainly to revise the formalizations of the Japanese adverb *dondon* (which roughly means ‘rapidly,’ modifying the rapid change) presented in Konishi (2003). In this paper, following the representation of event projection structure in Iwamoto (2008), first I re-formalize the aspectual meanings of 3 types of *dondon*-sentences presented in Konishi (2003), and clarify the event projection structures of these *dondon*-sentences meaning gradual change-of-state events. Then I extract and propose the general lexical meaning of *dondon* itself from these representations, and argue the differences from normal action-manner adverbs like *yukkuri* ‘slowly’. In the last section I revisit and reconstruct the suggestions in Konishi (1999) and pose some problems in this theory to be solved.